

都市は／を語る

石田英敬いしだ ひでたか

内容理解

この文章で筆者は、バルトの考えに依拠しながら、クノーの詩を例として、都市を巨大な意味空間として考える入り口を示そうとしている。本文を読み直しながら、空欄に入る適切な言葉を補ってみよう。

バルト「都市は一個の言説（ディスコース）である」

・都市について考える上で手がかりとなるのは、都市をその意味活動の生み出したものと考え、現にある都市の持つ¹の実態を言語活動のように考えてみることである。

バルト「都市の言語活動について語るとき、喩え「Ⅱ都市と言語活動との喩え」から分析に移行するにはどうすればよいのでしょうか」

・都市は一個の書かれた物であり、都市の住民はただ住んだり、動き回ったり、眺めたりしているだけで、都市という言説の²となっている。都市の中を動き回るとき、私たちは何をしなければならぬか、どのように移動するかに応じて、都市の言説のさまざまな断片を取り上げ、知らぬ間に³的な読者となっている。

クノー『百兆の詩』

・この作品には、各ページのソネット（十四行詩）を一行ずつに切り、十ページに渡ってそれぞれの詩行を選び取ることができるような工夫が凝らされている。この仕掛けによって、詩の一行をその詩の構成⁴として、読者は十の十四乗通りの「詩」を作りながら読むことになる。

語句

この文章の中で使われていた次の言葉を使って、短文を作ってみよう。
手がかり（二四四・11）

移行（二四五・1）

刻々（二四六・1）

個人差（二四八・12）

・都市を構成する無数の通りや区画や目印などは、都市という巨大なテキスト（記号活動の出来事が生み出したもの）の⁵ を構成する要素と考えられる。街を歩いているとき、私たちは無数の読み方のできる巨大な書物のある一ページを開いてその何行かを拾い読み、続いて別のページへと移っていくようにして、都市の⁶ 空間を現実のものとして読書体験しているのだ、と考えられる。

都市の記号作用の要素・都市の意味作用の単位・規則性は、どのようなものなのか。

ケヴィン・リンチ『都市のイメージ』

- ・都市で生活したりその中を移動したりするとき、私たちはその都市について何らかのイメージを形成し、その⁷ をもとに自分の位置や状況を把握している。
- ・個人差や社会階層やグループによる差異を越えて、共有される都市のイメージ、⁸ 「・イメージ」が形成される。
- ・都市のイメージの分析は、都市のイメージの構成要素を固定できるか、さらに、その構成要素の関係と⁹ 作用、そして、その形式的要素や¹⁰ に基づいてどのような意味づけがされるかを分析することで明らかにしていく。

要旨

筆者の考えの中で最も大切と思われることを、指定された言葉を使って、百字程度の文章にまとめてみよう。
〈指定語〉都市・イメージ・読者

発展

- 次の中で興味を持った事項について、図書館の書籍やインターネットなどを使って調べてみよう。
- ・バルトの哲学とは、どのようなものか。
 - ・クノー『百兆の詩』とは、読者にとってどのような作品か。
 - ・『ノートルダム・ド・パリ』とは、どのような作品か。

100